

# 古代エジプトとピグミーの関係

## —ピグミー研究者の視点を中心として—

北 西 功 一

The relationship between ancient Egypt and the Pygmies:  
From the viewpoint of Pygmy researchers

KITANISHI Koichi

(Received September 27, 2013)

### はじめに

これまで中部アフリカの熱帯雨林に居住するピグミーについては多くの本が出版されてきた。その中には、冒頭部分に、古代エジプトにピグミーがやってきた話が載せられているものがある。それは「今から4000年以上前に、古代エジプトの王のもとに樹木の国から神の踊り子であるピグミーが連れてこられた」といったもので、古代エジプトの碑文に記載されている話がもとになっている。本の冒頭のこの記述により、ピグミーはヨーロッパ文明の起源ともつながる壮大な歴史ロマンの中に位置づけられ、読者は興味をそそられることになる。

ヨーロッパの人たちは以前から古代エジプトとピグミーに何らかの関係があると考えていたようである。ただし、このピグミーは中部アフリカに実際に住んでいる人たちではなく、ヨーロッパの伝説上のピグミーである。例えば、アリストテレスはピグミーの居住地をナイル川の源流域であるとし（アリストテレス, 1969: 24）、ナイル川はエジプトにつながっている。この伝説上のピグミーの話がいかにして現実の中部アフリカに住む人たちと重ねあわされることになったのかについては北西（2010, 2011）で紹介したが、これらの論文では古代エジプトについてはほとんど触れていなかった。

本稿は、ピグミー研究者が上記のエジプトに連れてこられたピグミーの話をどのように記述しているかということを中心に分析する。ヒエログリフの碑文に残された話がエジプト学者によってどのように解釈されているのかについては北西（2013）で述べた。エジプト学者の解釈とピグミー研究者が本に掲載している話にはいくつもの相違点が存在し、エジプト学から見ると間違った内容の話がピグミー研究者の間で再生産されてきた。ピグミー研究者である私自身、実際にエジプト学の文献に読んでみるまでこのような状況にあるとは思いつかなかった。

多くのピグミー研究者が間違った部分も含めてこの話を繰り返しているということは、これが単なる研究者個人の問題ではないことを示している。ピグミー研究者もしくはヨーロッパ人が明示的もしくは暗黙のうちに描いていたエジプトとピグミーの関係のあり方とこの話に親和性があったと思われる。このヨーロッパ人が描くピグミー像を最後に考えてみたい。

### 1. ヒエログリフ解読以前におけるエジプトとピグミーの関係

先に述べたように、エジプトとピグミーの結びつきはヒエログリフの解読以前から想定され

ており、古くは古代ギリシャのアリストテレスの文献に見られる。これは、ツルと戦い虐殺されるコピトとしてのピグミーの話で、このテーマはホメロスのイリアスでも確認できる（北西、2010: 40-41）。このツルと戦うピグミーの話を古代エジプト、特にナイル川と結びつけて解釈しようとした試みが以前からずっと続いていた。Forsterが、1784年に書いた「Über die Pygmäen」という論文の中でこの試みについてまとめている。その内容を以下に紹介する。

…古代エジプト人にとって、ナイル川の水位の低下と人々の生存は結びついていて、ナイル川は綿密に観察すべきものであった。彼らはナイル川を神として崇拝し、それを図像において象徴的に表現しており、その水位の変化は寓意的な描写によって示された。プリニウス<sup>1)</sup>が言うには、メンフィスあたりのナイル川の水は16肘尺の高さに上昇し、その時の川の流れることによって耕地に実りをもたらす泥が提供され、施肥されることになる。この16という数字は決まっているもので、豊かな実りを意味するものとして古代エジプト人に受け止められており、いくつかのハドリアヌス帝<sup>2)</sup>の硬貨では低い位置にナイルが描かれている。プリニウスと同様にフィロストラトゥス<sup>3)</sup>もナイル川について述べている。16人の小さな男の子がナイル川を取り巻いていて、ナイル川のまわりで遊んでいるという絵があり、それは間違いなくナイル川が16肘尺の高さの水位にあることを暗示していると、彼は述べている。フィロストラトゥスはこれらの男の子がその小さな身長ゆえに肘尺を示していると考えている。…肘尺は古代エジプトにおいてナイル川を観測する道具の計測単位であり、彼らの言語ではPi-mahiと呼ばれていた。これらのことから、ピグミーとツルとの戦いの話を理解できる。エジプトでは11月にナイル川のまわりの土地から水が引き、種まきを始められるようになる。ちょうどこの時期に他の渡り鳥とともにツルが北から到来する。ツルは残された川の泥の中から食べ物を探す。ピグミーに死をもたらすということは、ナイル川の水が引くということの意味している。また当時、ピグミーの故郷はエチオピアであると考えられていて、それはそこからナイル川の水が流れてきたからである。…ホメロス自身がエジプトに行ったことがあるにしる、彼が寓話的なピグミーの話の手掛かりを知っていたにしる、また彼が単なる作り話であると考えていたにしる、ホメロスの時代までにすでにギリシャにおいてこの話は口頭伝承で広まっていたようである（Forster, 1843: 370-372）。

つまり、ナイル川の水の16肘尺の高さが16人の小さな男の子で象徴され、その小さな男の子の身長が肘尺であるためにピグミーを表すことになり、ピグミーがナイル川の水を象徴しているという。またこのナイル川の水はエジプト人にとって栄養豊かな土壌を運んでくることにより豊かな実りをもたらすものでもあり、とても重要で、宗教的な価値を持っている。ピグミーとツルとの戦いでツルがピグミーを大量に殺すということについては、ちょうどツルが渡ってくる時期にナイル川の水が引くということをしめしているという。

実際にこのような解釈でピグミーとツルとの戦いを説明することが正しいのかどうかについて、私自身は何とも言えない。ただし、古代エジプトとピグミーに何らかの関係があるのではないかということは、ヒエログリフが解読される以前、そして中部アフリカでピグミーが発見される以前から議論されていたことがわかる。

## 2. ピグミー研究者によるヒエログリフの話の間違った解釈の事例

ヒエログリフの解説がロゼッタストーンなどの碑文に基づいてフランス人のシャンポリオンによって19世紀前半に行われたことは有名である。ここでは、19世紀後半に中部アフリカにおいてヨーロッパ人がピグミーを発見した後に、ピグミー研究者がヒエログリフの文章とピグミーを結びつけようとして、間違った情報や解釈が広まった事例を紹介する。

フランスの人類学者 Hamy は1879年に発表された論文の中で古代エジプトとピグミーの関係について言及している。この論文はその時点までに集められた中部アフリカ地域の民族学のおよび形質人類学的データを包括的に分析したものである (Hamy, 1879; 北西, 2011)。

この論文では、Schweinfurth が Monbuttoo の Munza 王の宮殿で Akka と呼ばれるピグミーと出会ったことに言及しており、そこには「東のピグミーの主要な部分は最も早い時期の古代の時代から Akka と呼ばれていた。」と説明があり、その注に「Mariette は古代エジプト帝国のモニュメントに彫られたコビトの肖像画の横でこの名前を見つけた。」とある (Hamy, 1879: 97)。Mariette は当時のエジプト学の第一人者である。この話はその後、1880年代にピグミーに関する包括的な研究をした当時のフランスを代表する人類学者 Quatrefages によって引用され (Quatrefages, 1881: 105; 1882: 702; これらに加筆して本となった Quatrefages, 1887: 25, 253)、さらにその Quatrefages の本を引用する形でイギリスの人類学者 Flower が広めた (Flower, 1888: 68)。ただし、Hamy の論文には Mariette のどの文献を引用したのかは載っていない。

この話が載っている論文の中で Mariette の文献を引用しているものは私には一つしか見つからなかった。それは、19世紀末までのピグミーについての伝説と現実の中部アフリカのピグミーについての情報をまとめた Monceaux の論文である (Monceaux, 1891: 38)。

引用されている本は1877年に Mariette が書いた Deir-el-Bahari で、実際に Akka に対する言及が一カ所だけ存在する。この本は Deir-el-Bahari の遺跡にある絵およびヒエログリフの文章を分析したもので、Poun (後述の Punt を指す) の場所がアラビア半島ではなく紅海のアフリカ大陸側であることを Mariette が主張しているところに、Akka が出てくる。そこでは、Poun の長の娘が描かれている絵から、その娘の人種が Long-Bey によって中部アフリカからカイロに連れてこられた Akka の少女の人種と縁戚関係にあるということが容易にわかる、と述べられている (Mariette, 1877: 30)。つまり、Mariette は Akka という名前を見つけたわけでもなく、また絵もコビトの絵ではない。Hamy は本を読んだのではなく Mariette から直接もしくは間接的に話を聞いたのかもしれないが、明らかに誤解している。一方、Mariette の主張もかなり怪しい。

この間違った事例は、エジプトとピグミーにつながりがあってほしいというピグミー研究者の願望から生まれたものと思われる。しかもこの話は当時の著名な人類学者が自身の論文や著作に全く疑うこともなく引用しており、著者自身とそれを読む人たちは古代と現代が結びつく歴史ロマンのようなものを感じていたのではないだろうか。

## 3. Herkhuf の碑文のピグミー研究者による言及

ピグミー研究者による Herkhuf の碑文の言及に入る前に、ここではその内容を必要最低限紹介する。詳細は北西 (2013) を参照していただきたい。

この碑文は Schiaparelli によって1892年に初めて紹介された。その主人公 Herkhuf はエジ

プト古王国の第6王朝のファラオ Pepi 二世（在位は紀元前23-22世紀）の時代の政府高官で、南方への探検を4回行っており、その最後の探検で dng と呼ばれる体の小さな人を発見した。大部分のエジプト学者は dng をピグミーであると考え、一部の研究者はその可能性はあるものの断定はできないとしている。Dng が Herkhuf によって発見された土地は Yam という名前であり、Keane が1900年の論文でそこを樹木の国としているがそれは間違いで、場所は特定できないもののハルツームよりも北の一地方である可能性が高い。Herkhuf の100年前に Punt から同様の dng が連れてこられていて、Punt は紅海のアフリカ大陸側の沿岸とされている。Dng が住んでいた土地は当初「霊の国」と訳されていたが、Kuentz の1920年の論文でその訳は間違いで、Akhit という名称の当時のエジプト人が想定した地平線の果てにある土地と主張され、これがその後の定説となっている。Dng は神の踊りを踊るが、それは当時の小人症の人たちの役割と関係しており、エジプトに連れてこられたピグミーが神の踊りを踊ることからそれがエジプトの小人症の人に波及した、もしくはもともと小人症の人にそのような役割が与えられていて、遠くから来た体の小さな dng にも同じ役割が期待された、その両方の可能性がある（北西、2013）。

ここからはピグミーを調査した探検家や文化人類学者などが上記の話をいかに著書の中で取り上げているかを紹介する。有名な研究者のものを中心に、その話と中部アフリカの実際のピグミーを彼らがどのように結びつけていたのかを検討したい。

### Oscar Lenz

私が見つけた中でピグミー研究者で最も早くこの話を取り上げているのは、1870年代にドイツの調査隊の一員として現在のガボン付近に派遣され、Abongo というピグミーについて詳しい報告をした Lenz である（北西、2011: 58-59）。彼は1894年に「アフリカのコビット民族について」という題で講演を行い、その内容が論文となっている。その中で彼は Schiaparelli の研究を取り上げて、Herkhuf の4回の南方の旅と「コビット Denga」が連れてこられた話を Schiaparelli の研究に忠実に紹介している。彼は Denga が小人症の人である可能性があるとしつつも、「未開民族そして特にアフリカの黒人において、奇形の人は稀な存在で、それは多分出産のときもしくは若いうちに命を絶たれるためである」とし（Lenz, 1894: 408-410）、明示されていないものの、Denga は奇形ではなくピグミーである可能性が高いと考えている。

### Albert Bushnell Lloyd

Lloyd はイギリス人の宣教師で中部アフリカで布教をしつつ、1897年に Ituri の森でピグミーと出会っている。彼の探検記は1898年に出版された。古代エジプトの話は本の導入部にある（Lloyd, 1898: xi）。

古代エジプトの人たちは私たちの祖父よりもアフリカ内陸部について知っていたようである。第6王朝にまで遡る彼らの王の墓に残された記録から、その遠く離れた時代のエジプト人がナイル川の水源の大きな湖だけではなく、ピグミーの存在を知っていたことがわかる。アスワンの墓に、Mer-en-ka 王が、ナイル川の水源と想定される Punt 湖のそばにある Punt の国からピグミーを連れてくるために、彼の家来を派遣した様子が記述されている。また、5代前の王である Assa 王が彼の家来によってこの地から連れてこられたピグミーに会ったと言われていることも記録されている。

これは紀元前3200年頃にアフリカのまさに中心部が文明世界に知られていたことを意味する。…

典拠が載せられていないため、何を参考にしたかは不明である。墓は王のものではない。また、Puntがナイル川の水源の湖になっているのは、本来は紅海を船で行った話を無理やりアフリカ内陸部の話にしたためだろう。このような間違いはあるものの、Herkhufの碑文の話参考にし、これが中部アフリカのピグミーの話であるとみなしていることは明らかである。

### Paul Schebesta

ドイツ人宣教師・民族学者であるSchebestaのピグミーについての著作はそれ以前の探検記のようなものとは異なり、ピグミーについての最初の学術的な民族誌として広く知られている。彼も1933年に出版された著作の冒頭に古代エジプトの話を載せている (Schebesta, 1933: 17-18)。

私の前には昔の時代の古風で趣のある文書がある。それは偉大なファラオ Nefrikare の手紙の文で、伝説のピグミーの最も古く、そして多分最初の情報を含んでいる。この王から彼の最高司令官である Herihuf への手紙には次のように書かれている。

「あなたの王である私へのあなたの手紙に満足していることを私は記した。私はその手紙からあなたがあなたの軍隊とともに Iman の国へ侵入したことを知った。」

「あなたの手紙では、Iman の女神 Hator が Nefrikare のために準備をしたたくさんの最上等の贈り物を、あなたが持って帰る準備をしていることが述べられている。」

「私はさらにあなたの手紙で、あなたがピグミーを連れてくることを知った。そのピグミーは伝説の国 the Land of Legend で神の踊りを踊り、そのコビトは Aosis の時代に神の財宝管理人である Baured が Punt から連れてきたコビトと明らかに似ている。あなたはまた、私の家来によって以前に持って帰られたいかなるものも彼と同じ価値を持つものはないということを、私に知らせてくれた。」

「あなたが伝説の国から連れてくる随行者の中にピグミーがいるので、彼は神の踊りを踊り、それによって王 Nefrikare の心を喜びで満たす。」

あなたが彼を船で連れてくるとき、彼が水に落ちないように船の両側を見張り続けるために信頼できる人を選びなさい。夜、彼が寝ているとき、彼のそばで眠るために10人の頑強な人を割り当てなさい。」

「私はこのピグミーに会うことを強く切望する。」

「ピグミーを私の宮殿まで生きてまま強健で健康な状態で連れてきなさい。その時私は、Aosis の時代に神の財宝管理人に与えられた褒美以上のものをあなたに与えるだろう。このことから、このピグミーと会うことをどれだけ私が望んでいるかを判断しろ。」

Schebesta の記述では「霊の国」もしくは Akhit が「伝説の国」となっており、これは Maspero の解釈をもとにしている文献を参考をしていると思われる (北西, 2013参照)。コビトではなくピグミーと書いていることから、Schebesta は明らかにこのエジプトの話の登場人物がピグミーであると考えている。Yam が Iman となつてはいるものの、「木々の国」とはされておらず、次の著作と比較すると余計な情報が存在しないという点ではより正確である。

Schebesta は1940年にフランス語で Les Pygmées という本を出版している。この本で古代エジプトに触れている部分を紹介しよう (Schebesta, 1940: 14-15)。

古代エジプトの宗教はコビトに重要な役割を与えていた。この宗教は、よく知られたピグミーの特性のある種の文化的残存物を受け継いでいて、それは第一には彼らの踊りである。第6王朝（およそ紀元前2400年）の記録は、ファラオの宮廷において、ピグミーに対して与えられた高い評価を東洋の文体においてははっきりと示している。

Herehuf (Hirkhouf) は南の地への探検の指揮官で、ファラオに持って帰るお土産の中にピグミーが含まれていることを知らせた。王の満足は彼の返信の中に満ち溢れている。

「宮殿にいる王にあなたが送った手紙は、あなたとあなたの仲間が木々の国 Pays des Arbres から運よく帰還することを知らせるものであった。あなたはこの手紙の中で、すべての種類の重要で見事な贈り物を持ってきたことを知らせている。…」

「あなたはこの手紙で、あなたが霊の国 Pays des Esprits から神の踊り子であるコビトを連れてきたこと、そしてそのコビトは Asosi 王の時代の神の印の管理者である Ba-Wer-Djed が Pount から連れてきたコビトに似ていることを知らせた。」

「あなたは王に、そのような種類のコビトが、木々の国の旅を企てた人たちの中ではあなたに至るまで連れてこられることはなかったということを知らせた。北への道をとれ。すぐに急いで王宮までやってこい。なぜなら、あなたは霊の国に探しに行ったこのコビトを連れて帰るからである。」

「神の踊り子に幸あれ。彼は永遠に生きる王 Neferkara の心を喜ばせ、王は彼を切望している。」

「あなたが船で彼を連れてくるとき、彼の後ろと船の両側に彼が水に落ちないか見張るために信頼できる人を配置しなさい。夜は、彼が寝ている間、信頼できる人が船室の中で彼の後ろで眠らなければいけない。一晩に10回彼を監視しろ。王は金属の国 Sinai と Pount へのあなたの旅で連れてきたこのコビトに会うことを望んでいる。あなたが宮殿に着いたとき、生きていて、健康で、無傷の状態でのコビトをあなたの身近においていなければならない。王は、Asosi 王の時代に神の印の管理人である Ba-Wer-Djed にかつて与えた以上にあなたにたくさんのものを与えるだろう。なぜなら、王にとってこのコビトと会うことはとても大切なことであるからだ。関係のある地方の役人に、立ち寄ったどの場所でも、どの神殿でも、出し惜しみをしないで彼に食料を提供するために、命令が発せられた。」

私たちは、エジプト人がピグミーの国まで探検を推し進めたとは考えていない。彼らはむしろ、北のほうに危険を冒してやってきたピグミーをエジプトに連れてきたのだろう。

Schebesta の二つの本を比較すると、1940年の本でかなり情報が付加されていることがわかる。しかし、Iman (Yam) が木々の国になっているなど、間違っただけに修正されている部分もある。これから後の文献の記述を見るとわかるように、この1940年の本の記述が参考にされているとみられるものがいくつもある。この本が古代エジプトとピグミーの関係についてのピグミー研究者の記述をある程度決定づけている。

### Henri Trilles

フランス人宣教師でピグミーを研究した民族学者 Trilles も1945年に出版した本に古代エジプトの Harkhuf の話を載せている。その本の第2章のタイトルが「紀元前4000年紀のピグミー」であり、内容はかなり詳細である (Trilles, 1945: 41-42)。彼の注を含めて示す。

テーベの第4王朝の Pépi 二世は、彼の戦争の指揮官である Harkhuf (Trilles の注1) を、彼の権力に反抗した彼の帝国の南の黒人の人たちと戦うために派遣した。Harkhuf の命令のもと、槍と

矢を持ち強力な戦車の装備も備えた重装備の兵士が出発した…

Harkhuf は勝利者として帰ってきた。彼は征服された部族のたくさんの捕虜を無理やり連れてきており、おびたしい貢物を持ち帰った。届けられた贈り物の中に、敗者であるコビトがいた。Pepi 二世が送った返事には、彼の喜びが満ち溢れている。

あなたが王に送った手紙を宮殿で知った。それはヤシと木々の国 (Pays des Palmes et des Arbres) からのあなたとあなたの仲間の幸運な帰還を知らせるものだった。あなたは手紙で、あなたが木々の国 (Pays des Arbres) と霊の国 (Pays des Esprits) (Trilles の注2) から神の踊り子 (Trille の注3) であるコビトを連れて帰り、そのコビトは神の印の管理者である Ba-Wex-Djed が Isosi 王の時代に Pount から連れてきたコビトと似ていることを伝えている。あなたは王に、木々の国への旅を企てた人たちの中ではあなたに至るまでそのような種類のコビトを連れてきた人はいなかったということを伝えた。北へと道をとれ、ただちに急いで王の住居にやってこい。それは、あなたが霊の国へ探しに行ったコビトを連れてきたからである。

神の踊り子に幸あれ。彼は王の心を喜ばせる。永遠に生きる Neferkara 王が熱望するコビト。船に乗って彼があなたと一緒に、彼の後ろと船の両側に水に落ちないように彼を見守るために信頼できる人を配置しろ。夜、彼が寝ているとき、信頼できる人が船室の中で彼のそばで寝ずの番をしなければいけない。夜の間に10回見回りをすること。陛下はあなたが Pount から連れてくるコビトと会うのが待ち遠しい。あなたが宮殿に着いたとき、生きていて健康で無傷のコビトを連れていなくてはならない。彼の陛下は、神の印の管理人 Bar-War-Djed が Isosi 王の時代の昔に受けとったもの以上の豊富な報奨を、あなたに与える。

注1：Harkhuf は Elephantine の領主で、メンフィスの第6王朝の5番目の王である Mernère によって国の南部の総督に任命された。Mernère の異母兄弟である Pépi 二世が彼の跡を継いだ。Harkhuf は Yam もしくは Nubie の地に3回の遠征を行った。…Pépi 二世は6歳の時に王位につき、100年間統治した。…

Harkhuf は問題のコビトを連れてきて、ファラオの墓石に Nèm-hoter という最初の Akka の名前が残されており、そのコビトは紀元前2500年頃に名前も含めて知られている。

コビトが連れてこられた Pount の国は今日のソマリアである。その時代は Akka が分散していた時代で、今日よりもかなり広く分布していた。多分彼らはブラック・アフリカの南部までの熱帯アフリカ全体に広がっていたのだろう。

注2：霊の国。月の山は南からキリマンジャロ、ルウェンゾリ、キボで標高数千メートルの頂上には万年雪があり、黒人の目には霊の住家に見えていた。彼らは決してそのような危険な場所には行かなかった。のちの司教である Leroy 司祭が彼の司教の Courmont とキリマンジャロの登山を行ったが、その時まで未踏であり、そこで聖なるミサが行われた。これは聖なる霊、天の霊の住家である。

注3：ファラオの石碑に Akka の名前が残されている。最初に知られているのは、Nèm-Hoter である。

彼の記述には Schebesta (1940) と重なる部分も多いが、一方でそれまでのピグミー研究者に比べてより詳細な部分もある。ただし、たくさん間違いもある。例えば、重装備の兵士という記述やコビトが敗者で捕虜となったという話は碑文には見当たらない。注では Harkhuf が Yam に遠征したことになっているが(ただし4回ではなく3回)、本文中ではその場所は「ヤシと木々の国」になっている。「ヤシ」がなぜ出てきたのか不明である。また、「霊の国」につ

いての注での説明では、彼は月の山を「霊の国」と推定しているが、あまりにも南に位置しすぎており、そこであるとする根拠はない。また、Nèm-Hoter という Akka の名前がファラオの墓石に刻まれていると述べているが、Nèm-Hoter がなぜ Akka であるかわかるのか説明がない。決定詞から体の小さな人ということがわかる可能性はあるが、それ以上の情報が得られるとは想像しがたい。Trilles は上記の本文の最後にもう一つ注を付けており、あまりにも長いので省略したが、そこでは彼がフランスの博物学者 Théodore Monod の著作の間違いを指摘するなど、多くの文献を読んでこの話を記載していることがわかる。とはいえ、Trilles 自身のここでの記述は彼の議論に都合がよいように情報を組み合わせ、それに自身の想像を加えたものとなっている。

### Noël Ballif

フランスの人類学者 Ballif は1946年にコンゴ共和国の Sangha 川流域、1975年に中央アフリカ共和国の Lobaye 川流域、1982年にコンゴ共和国北部でピグミーの調査を行った。一回目の彼の調査の後に書かれた本の題名が「Les Danseurs de Dieu (神の踊り子)」である (Ballif, 1954)。この本の導入部を読めば分かるように、これは明らかに Herkhuf の碑文の中の「神の踊り」を意識している。この本の古代エジプトの話は Schebesta (1940: 14-15) を引用しており、内容はほぼ同じである。Yam という単語は出てこず、「木々の国 Pays des Arbres」となっており、また「霊の国 Pays des Esprits」も出てくる (Ballif, 1954: 11-12)。

Ballif は1992年にもピグミーに関する本を出版しており、その中でも古代エジプトとピグミーの関係について詳しく述べている。大部分はこれまでの話と重なるので、地名のみを検討する。1992年の本には1954年の本とは異なり「Yam の国」が登場する。注での説明では Yoyotte (1953) を引用して (北西, 2013参照)、Yam は「木々の国 le pays des arbres」もしくは「木の国 le pays de l'arbre」で、下ヌビアにある Dunkul のオアシスであると説明している (Ballif, 1992: 66)。Yoyotte (1953) では Yam を Dunkul であるとしているが、彼の論文に「木々の国」という説明は存在しない。「木々の国」が中部アフリカの熱帯雨林を指さないということを理解しつつも、以前からの「木々の国」という説明を捨てきれていないことがわかる。また、「霊の国 pays des esprits」はそのままである (Ballif, 1992: 67)。

### Martin Gusinde

ドイツの民族学者で1934年頃にピグミーの調査を行った Gusinde は1956年にピグミー研究の包括的な著作を出版した。彼も古代エジプトとピグミーのつながりについてその中で取り上げている。まず、彼は、Bes や Ptah がピグミーの姿をそのまま写したとしか思えないと述べている (グシンデ, 1960: 1, Bes と Ptah については北西 (2013) 参照)。また、Yam は「樹木の国」とし、それをナイル川の水源近く近の森林地帯に位置づけている。また Akhit は「霊地」と表現されている (グシンデ, 1960: 2)。また、この古代エジプトのピグミーは「神の踊り子」で、儀礼的・呪術的な踊りをしてよい天候を招来するよう、雨がたくさん降って耕地を潤すよう、まじないをするつとめがあった、と述べている (グシンデ, 1960: 3)。これは上記の Georg Foster が記したピグミーの伝説で、ピグミーがナイル川の水を象徴しているという話と関係があるのかもしれない。また、彼はピグミーが踊りが好きであるということ指摘し、これと古代エジプトの「神の踊り子」との関連を示唆している (グシンデ, 1960: 3, 99-100)。古代エジプトの話をしてできるだけ現在のピグミーに結び付けようとしていることがう



かがえる。

### Colin Macmillan Turnbull

Turnbull はアメリカの人類学者で、ピグミー研究者として最も有名な人と言ってもよいだろう。彼の著作は研究者ばかりでなく、一般大衆にも広く読まれ、彼のピグミー像は大きな影響力を持っている。彼は何冊か本を出版しているが、最も読まれているのは1961年に出版された「The Forest People」である。この本にも古代エジプトの話が出てくる (Turnbull, 1961: 20)。

記録に残っているもので最も早い時期における (北西注：ピグミーに対する) 言及は、よく知られているツルとピグミーの戦いについてのホメロスの有名な言及ではなく、第4王朝においてナイル川の水源を発見するためにエジプトから派遣された探検隊の記録で、それはだいたい紀元前2500年くらいのものである。ファラオ Nefrikare の墓に、彼の指揮官である Herkouf の報告が保存されていて、彼は月の山の西の大きな森に入り、そこで木々の人々 (a people of the trees) を発見し、彼らは小さな人たちで、彼らの神に対する歌と踊りを行い、その踊りはそれまでに見たことのないものであった。Nefrikare は Herkouf に返信を送り、その中で彼にこれらの神の踊り子の一人を連れて帰るように命令していて、またその神の踊り子に危害が及ばないように、彼をどのように扱って世話をするかについて明確な指示を与えている。不運なことに、話はそこで終わる。ただし、後のエジプト人の記録から、その時にはすでにエジプト人は実際に生きていたピグミーと比較的親しい関係になり、ピグミーは今日生活しているまさにその場所で、数千年間さかのぼった時代に、彼らの神に対して彼らの踊りや歌をおこなうことが特徴的な現在と同じ生活を行っていたことが、私たちにはわかる。

これまでの説明からわかるように、明らかな間違いがたくさんある。例えば第4王朝は第6王朝で、Herkhuf の探検の目的はナイル川の水源の発見ではない。碑文が残されているのはファラオの墓ではなく Herkhuf 自身の墓である。月の山は Herkhuf の話に出てくることはなく、当然その西の森にも行ってはいない。また、これまで多くの著者が「木々の国」としていたのが「木々の人々」となっている。さらにその人たちはエジプト人にとっての神の踊りではなく、彼ら自身の神に対する踊りを行っている。

Turnbull はこの話に引用文献をつけていない。いろんな著作に言及されている古代エジプトとピグミーの話を、自身が調査したピグミーにつながるように適当に組み合わせ、都合よく解釈していると思われる。彼はまさに雪の山 (ルウェンゾリ) の西の Ituri の森でピグミーを調査し、ピグミーが独特の歌と踊りを持っていることを発見している。

Turnbull が1983年に出版した本にも古代エジプトの話が出てくる (Turnbull, 1983: 12)。

4000年以上前の古代エジプト人が、月の山近くの同じ森の同じ部分に住んでいるピグミーについての説明を私たちに提供し、歌い手と踊り手としての彼らの能力と森への宗教的な深い愛情によって彼らの特徴づけており、一方で彼らのかなり小さな身長は付随的な記述にとどまっていることは意味のあることである。

やはり、自身が調査したピグミーにつなぎ合わせるような話をしており、特に前の本と違う

部分として、「森への宗教的な深い愛情」という表現があるが、Herkhoufの話にはそのようなことは一切出てこない。

### Lucien Demesse

Demesse はフランスの人類学者で1954、1957-59、1962-63年にコンゴ共和国と中央アフリカ共和国でピグミーの調査を行っている。彼は何冊かの本を出版しているが、その中で古代エジプトに触れているのは1978年に出版された本で、詳しく述べられている (Demesse, 1978: 24)。

小さな身長が特徴的な人種が中部アフリカの森に存在することは、古代地中海世界の最も古い時代から知られていた。エジプトでの古代帝国の最高の時期であるメンフィス由来の第6王朝のファラオは Nibie に興味を持っていた。その一人である Merentrê は、彼自身がナイル川を Eléphantine まで遡り、そこで、Herkhouf の指揮のもと探検隊をより南に広がっている Iam の国を踏査するために派遣した。

彼の大旅行は完了し、ファラオの派遣者はメンフィスの宮廷に手紙を送った。その中で彼はかなりの戦利品、とくに捕まえたピグミーを連れて帰ると報告した。その間に、Merentrê は死に、彼の継承者である Pepi 二世 (Neferkara) がその報告を受け取り、Herkhouf に返事をした。その返事は、異例の捕虜に対して王がどれくらい重要に考えているかを示している。「あなたとあなたの仲間が運よく木々の国 Pays des Arbres から帰還することを知らせる手紙を、あなたが宮殿の王に送ったことを知った。あなたはこの手紙で、神の踊り子であるコビトを、霊の国 Pays des Esprits から連れてくることと、そのコビトが神の印の管理者 Ba-Wer-Jed が Asosi 王の時代に Pount から連れて帰ってきた人と似ていることを知らせている。あなたは王に、そのような種類のコビトが、木々の国の旅を企てた人たちの中ではあなたに至るまで連れてこられることはなかったということを知らせた。北への道をとれ。ただちに急いで王宮までやってこい。なぜなら、あなたは霊の国に探しに行ったこのコビトを連れて帰るからである。神の踊り子に幸あれ。彼は永遠に生きる王 Neferkara の心を喜ばせ、王は彼を切望している。」

エジプト人が本当に現実のピグミーのテリトリーに到達していたかは、私たちにはわからない。Herkhouf がメンフィスの宮殿に連れてきた人は、多分、北のほうへ危険を冒していったグループの一部だろう。また、その時代にはピグミーが今日よりもかなり地理的に拡大していたという仮説を提案することもできるだろう。…

話の筋は、前半部分を除いて、Schebesta (1940) とほぼ同じである。特に、最後の部分の北に危険を冒してやってきたピグミーかもしれないという説も一致しており、引用文献の記載はないものの、明らかに Schebesta (1940) を参考にしていると思われる。木々の国や霊の国については訂正されることなく使用されている。Demesse の話の前半部分は間違いが多い。Merentrê が Eléphantine に行ったという話は存在せず、Herkhouf が行った4回の南方への探検のうちの3回は確かに Merentrê の時代に行われているが、コビトを連れて帰る報告をしたのは4回目で、その手紙は明らかに Pepi 二世に対してのものである。ただし、彼は Herkhouf が探検をおこなった場所を Iam (Yam の別表記) としており、この部分は正しい。とはいえ、Iam が以前には木々の国と訳されていたことを知らずに、その両方が話に出てきている。

### Serge Bahuchet

フランスの人類学者で中央アフリカ共和国においてアカ・ピグミーを調査した Bahuchet はピグミーに関する本を数冊出版しているが、その中に古代エジプトについての記述はない。ただし、彼は1993年に発表された論文「L'invention des Pygmées」で古代エジプトの記述を分析している。この論文自身は古代ギリシャから近世までのヨーロッパ人における伝説のピグミーの歴史およびそれと中部アフリカで発見された体の小さな人たちがいかに結びついたのかを議論したものである。Bahuchet は dng が一般にピグミーとされ、それは小人症の人を表す nmw と異なる存在であるが同じ決定詞がついていることで、小人症ではない体の小さな人と解釈されているからであると、エジプト学の研究を紹介している。その一方で Maspero は dng をピグミーとは訳さなかったとも述べている (Bahuchet, 1993: 167)。はっきりとは書かれていないものの、彼は dng をピグミーと断定することは難しいと考えているようである。

### Stephanie Karin Rupp

アメリカの人類学者でカメルーンでバカ・ピグミーを調査している Rupp は2001年に博士論文を提出し、そこで古代エジプトについてわずかに触れている。そこで彼女は「地平線の住民 the horizon-dweller」という表現をしており (Rupp, 2001: 3)、これは Kuentz の Akhit のことを指しているのは明らかで、木々の国や霊の国を使用していないことから、エジプト学の文献に基づいて述べていると思われる。

### Kairn A. Klieman

Klieman は、比較歴史言語学の方法を用いて、中部アフリカの歴史、特にピグミーの歴史の再構成を行い、2003年に出版した本の中で古代エジプトの話を取りあげている。ただし、その内容はこれまで紹介した研究者とはかなり異なり、また、エジプト学の研究を踏まえて議論している。彼女は、古代エジプトにおいて、小人症は肯定的な意味を持っている異常であり、小人症の人たちは隠れた霊的能力を保持し、創造神と子供の誕生にかかわる存在であると考えられており、そのような信仰が Ptah や Bes などのコビトの神の崇拝に置き換わっていったという。そして、これが古代ギリシャのコビトの神の信仰に引き継がれ、さらに現代のヨーロッパ人のピグミー観に遠くつながっていると述べている (Klieman, 2003: 4-20)。

一方で Herkhuf の話に関しては dng がピグミーであることを確証できないという。彼女は注で簡単に Herkhuf の話を紹介した後、dng がピグミーであるという主張の根拠を否定している。まず、nmi が古代エジプトでコビトを指しており、それとは違う単語があてられているので小人症ではない体の小さな人であるという主張に対しては、二つの反論を出している。一つは、小人症を表す単語は nmi だけではなく小人症の症状ごとに他にも単語があるので、dng が小人症の人であってもかまわないということである。二つ目は、南の地が神の領域であると古代エジプト人によって考えられていたことと、女性のヌビア起源の踊り子が特に王の宮殿において賞賛されたことから Pepi 二世がヌビア起源のコビトについて、ヌビアにおいて普通に用いられている単語を借りて言及した可能性があるという (Klieman, 2003: 30)。私自身も彼女が主張するように dng をピグミーとする確実な証拠があるわけではないと考えている。ただし、南方から来た小人症の人であるという証拠、もしくは dng がピグミーではないという証拠も存在しない。確実なことはわからないというのが科学的な立場ということになるのだろう。

#### 4. 考察

本稿では、主として文化人類学を中心とするピグミー研究者が Herkhuf の話をどのように紹介しているのかを取り上げた。その中でわかったことは、Bahuchet や Rupp、Klieman などは例外だが、ピグミー研究者の多くが古代エジプト学の進展に伴って得られた新しい知見を全く取り入れようとせず、先人のピグミー研究における言及を参照するにとどめ、それを再生産し続けたことである。

多くのピグミー研究者が間違っ て記述している点は、まず、dng が連れてこられた場所である。最も初期の古代エジプト学者を除くと、Herkhuf は Yam というところから dng を連れてきたとされている。しかし、多くのピグミー研究者は「木々の国」という初期のわずかな研究者が用いていた訳を使い続けた。中には Demesse のように Yam という訳を知っていつつも、それが「木々の国」とされたものと同じものであると気付かず、両者を併記している研究者も存在する。もう一つは「霊の国」である。古代エジプト学者の解釈が変わるの1920年代で、Yam に比べるとかなり後のことになるが、「地平線の人たち (の地) Akhit」と記述しているのは Rupp のみである。

ただし、彼らの著作では、dng の本来の居住地である「霊の国」が登場する回数は「木々の国」に比べると少ない。これはピグミーの分布域が中部アフリカ熱帯雨林であるという事実と「木々の国」があまりにも適合することと、「霊の国」という表現が空想的すぎると感じられたためだろう。ただし、中には Trilles のように「霊の国」を「月の山」であると推定する人も存在し、「霊の国」を中部アフリカ熱帯雨林にできるだけ近づけようとしているが、Kuentz は「地平線の人たちの地」をそれよりもかなり北に推定している (北西, 2013)。

ピグミー研究者がよく取り上げるもう一つのテーマは「神の踊り」もしくは「神の踊り子」である。これは Herkhuf の文章に実際に書かれていることなので間違いではないのだが、ピグミーが特徴的な歌と踊りを持っていることと、明示的もしくは暗示的に関連付けて説明されている。古代エジプトでは小人症の人たちが聖なる踊りを踊る事例が存在しており、必ずしもピグミーと結びつける必要はないということは北西 (2013) で示した。

Akka の名前をコビトの像の横で読んだという話は Hamy、Quatrefages、Flower などが取り上げて以降は Trilles が述べている。現在では、Akka という名称がピグミーの中の1グループの他称でしか使われていないことから、この話を取り上げる研究者はいない。Herkhuf の話に出てくるコビトが dng という名称を持っていること、ヒエログリフでは子音しか表記せず、一方 Akka には子音は k しかなく、一音のみを文章中に見つけたとしても何の証拠にもならないということを知っていればこのような間違いはなかったはずである。

ピグミー研究者がそのような間違いを犯したのは、他の分野の最新の研究を参照するのを怠ったことが直接的な原因ではあるものの、当時は現在のように他分野の論文を簡単に手に入れられるわけではなかったので非難はできない。私にはそのような間違いが再生産されたことが興味深い。研究者の間では Schebesta の著作 *Les Pygmées* (1940)、一般の人たちには Turnbull の *The Forest People* (1961) の影響が大きい、それよりもそのような記述を受け入れる素地が人々の間にあったということが問題である。「古代エジプトのファラオの前で神の踊りを踊る樹木の国からやってきたピグミー」というイメージが、中部アフリカに住む体の小さな人々に対するイメージと重なりあって、ヨーロッパ人の心をひきつける話となった。その話に取りつかれた人たちが、さらにこの話を魅力あるものに再構築し、再生産したのであ

る。

この魅力とはなんだっただろうか。それは、ピグミーが4000年以上前からずっと中部アフリカの熱帯雨林で現在と同じように暮らしているという観念だろう。太古の姿をそのまま残している原始的な存在としてのピグミーである。北西(2011, 2012)では、ピグミーは19世紀後半に発見された当初から人類の起源と関連付けられていたことを示した。それにぴたりと一致している。この話はみんながそうあってほしいと考えるものだった。

ただし、ヨーロッパ人は、この話以前から、ピグミーと古代エジプトには特別な関係が存在すると考えていたようである。それは Hamy の記述、さらに18世紀後半の Forster の論文からもうかがえる。ただし、Forster の論文は中部アフリカに住む現実の人間ではなく、空想上、伝説上のコビットについてのものである。伝説上のピグミーとエジプトの関係はアリストテレスのように古代ギリシャまでさかのぼれるかもしれない。このようなヨーロッパに綿々と受け継がれている観念としての伝説のピグミーのイメージは、現実のピグミーの姿と混ざり合って、古代エジプトとピグミーを結びつけているのだろう。

このように、ヨーロッパ人には、その他のアフリカの人たちやその他の地域の先住民とは違った何らかの思いがピグミーに対して存在するようである。それについては Klieman が彼女の著書の中で触れているが(Klieman, 2003: 3-20)、この議論は伝説のピグミーと現実のピグミーの両方を綿密に分析する必要がある、今後の研究の課題としたい。

## 注

- 1：帝政ローマ時代の博物学者・政治家・軍人。生没年は29-79年。
- 2：古代ローマ皇帝で在位は117-138年、生没年は76-138年。
- 3：ローマ帝政時代のアテネのソフィスト。生没年はおよそ170-250年。

## 参考文献

- アリストテレス 1969 『アリストテレス全集7動物誌(上)』(島崎三郎訳) 岩波書店。
- Bahuchet, S. 1993. L'invention des pygmées. *Cahiers d'Études Africaines* 33 (1): 153-181.
- Baliff, N. 1954. *Les Danseurs de Dieu: chez les Pygmées de la Sangha*. Hachette, Paris.
- Baliff, N. 1992. *Les Pygmées de la Grande Forêt*. L'Harmattan, Paris.
- Demesse, L. 1978. *Changements Techno-Économiques et Sociaux chez les Pygmées Babinga (Nord Congo et Sud Centrafrique)*. SELAF, Paris.
- Flower, W. H. 1888. The Pygmy races of men. *Nature (London)* 38: 44-46, 66-69.
- Forster, G. 1843. *Georg Forster's Sämmtliche Schrifte*. Vol. 4. F. A. Brockhaus, Leipzig.
- グシンデ, M. 1960. 『アフリカの矮小民族-ピグミーの生活と文化』平凡社(築島謙三訳, Gusinde, M. 1956. *Die Twiden: Pygmäen und Pygmoide im Tropischen Afrika*. W. Braumüller, Wien).
- Hamy, E.-T. 1879. Essai de coordination des matériaux récemment recueillis sur l'ethnologie des négrilles ou pygmées de l'Afrique équatoriale. *Bulletins de la Société d'Anthropologie de Paris* 2-3 série: 79-101.
- 北西功一 2010 「ピグミーという言葉の歴史：古代ギリシアから近世ヨーロッパまで」『山口大学教育学部研究論叢』60(1): 39-56。
- 北西功一 2011 「ピグミーとヨーロッパ人の出会い-1860~1870年代を中心に-」『山口大学教

- 育学部研究論叢』61(1): 51-4。
- 北西功一 2013 「Herkhuf のコピトとピグミー—エジプト学における研究の概要—」『山口大学教育学部研究論叢』63(1): 83-94。
- Klieman, K. A. 2003. *“The Pygmies Were Our Compass” Bantu and Batwa in the History of West Central Africa, Early Times to c. 1900 C.E.* Heinemann, Portsmouth.
- Lenz, O. 1894. Über die sogenannten Zwergvölker Afrikas. *Schriften des Vereins zur Verbreitung Naturwissenschaftlicher Kenntnisse in Wien.* 34: 401-438.
- Lloyd, A. B. 1899. *In Dwarf Land and Cannibal Country: A Record of Travel and Discovery in Central Africa.* T. Fisher Unwin, London.
- Mariette A. 1877. *Deir-el-Bahari, Documents Topographiques, Historiques et Ethnographiques Recueillis dans ce Temple pendant les Fouilles Exécutées par Auguste Mariette-Bey.* Hinrichs, Leipzig.
- Monceaux, P. 1891. La légende des pygmées et les nains de l’Afrique équatoriale. *Revue Historique* 47: 1-64.
- Quatrefages, A. 1881. Les Pygmées d’Homère 1. *Journal des Savants*: 94-107.
- Quatrefages, A. 1887. *Les Pygmées.* Librairie J.-B. Baillière et Fils, Paris.
- Rupp, S. K. 2001. *I, You, We, They: Forest of Identity in Southeastern Cameroon.* A Dissertation presented to the Faculty of the Graduate School of Yale University.
- Schebesta, P. 1933. *Among Congo Pygmies.* Hutchinson, London (Translated by G. Griffin, 1932. *Bambutu, die Zwerge vom Kongo.* F.A. Brockhaus, Leipzig).
- Schebesta, P. 1940. *Les Pygmées,* Gallimard, Paris (Translated by F. Berge).
- Trilles, H. 1945. *L’Âme du Pygmée d’Afrique.* Les Éditions du CERF, Paris.
- Turnbull, C. M. 1961. *The Forest People.* Simon and Schuster, New York.
- Turnbull, C. M. 1983. *The Mbuti Pygmies: Change and Adaptation.* Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Yoyotte, J. 1953. Pour une localisation du pays de IAM. *Bulletin de l’Institut Français d’Archéologie Orientale* 52: 174-177.